紅樓夢戀愛譚考

船越達志

はじめに

『紅樓夢』にはいくつかの主題がある。その中でも主人公の賈寶玉と林黛玉、薛寶釵（以下「寶黛釵」と略稱）の三角關係を中心とした戀愛譚は極めて大きな主題である。しかしこの戀愛譚は曹雪芹原作部分八十回のうちでも、第三十五回以前の前半部分に固まって描かれているように見受けられる。筆者はこういった偏りはこの小說の複雜な形成過程に由來するものと考える。第三十五回付近を境に戀愛譚を中心とした描寫が見えなくなることと『紅樓夢』の形成過程を關連づけて解釋しようとする見方は、既に李賢平氏によって試みられている。李氏は言語的な特長及び富察明義という人物が刊本以前のテキストを見て詠んだ詩「題紅樓夢」の內容が戀愛譚に偏っている事を指摘した上で、現行本は第三十六回まで來ると突然格調が一變し、第三十七回以降は戀愛譚があまり描かれなくなることを指摘した。その上で李氏は戀愛譚のみを中心とした稿があったのではないかと推測する。[1] しかし李氏の論では、戀愛譚の內容分析も、前半と後半の內容の比較も全くなされていず、そこに生じる問題點の指摘もなされていない。したがってその內容の變化と形成過程を結びつける見方も曖昧なままになっている。本稿は第三十五回以前を前半部、第三十七回以降を後半部と分けた上で、そこに描かれた內容を戀愛譚という視點から仔細に吟味し、『紅樓夢』形成に關する一端を垣間見んとするものである。

一　前半部における寶黛釵三角關係の構築

(1)　林黛玉

自在榮府以來、賈母萬般憐愛、寢食起居一如寶玉、迎春探春惜春三個親孫女倒且靠後。便是寶玉和黛玉二人之親密友愛處、亦自較別個不同、日則同行同坐、夜則同息同止、眞是言和意順、略無參商。不想如今忽來了一個薛寶釵、年紀雖大不多、然品格端方、容貌豐美、人多謂黛玉所不及、而且寶釵行爲豁達、隨分從時、不比黛玉孤高自許、目無下塵、故比黛玉大得下人之心。便是那些小丫頭們、亦多喜與寶釵去頑。因此黛玉心中便有些悒鬱不忿之意。寶釵卻渾然不覺。[2]

（林黛玉が）榮國府に來てからは、賈母は何かにつけても可愛がり、寢食起居に對しては全く寶玉と同等に扱い、迎春探春惜春の三人の孫娘はしばらく後回しといった有樣です。寶玉と黛玉との親密さについても、また自ずから他人とは違っておりまして、日中は一緒に行き一緒に座り、夜分は一緒に休み一緒に止まるといった調子で、まことに言葉も氣持ちも通じており、仲の悪い樣子

は殆ど見られません。ところが今忽然と薛寶釵という人物がやってきますと、年令は（黛玉より）それほど多いわけではありませんが、品格は方正で容貌は豐かで美しく、黛玉でさえ及ばないという人が多いほどです。その上寶釵のやる事は度量が大きく、分をわきまえ時に從い、黛玉の孤高で自負する所があり眼中には下々の事などおかまいなしといった調子とはよほど違っておりますので、黛玉に比べてはるかに使用人たちの心を摑んでおります。侍女たちもまた寶釵と一緒に遊ぶのを好む者が多いのであります。この爲黛玉は心中に憂鬱でいまいましい氣持ちを抱いております。寶釵の方は全く（黛玉の氣持ちに）氣づいてはおりません。

（第五回）

林黛玉は賈母の格別の庇護のもと賈寶玉と一緒に育てられた。二人は完全に意氣投合し、仲の悪い様子は殆ど見せることがなかった。しかしそれも薛寶釵の登場によって一變する。人當たりの良い寶釵は忽ち人心を捕らえていく。しかしそれは黛玉にとって我慢できるものではなく、黛玉は寶釵の存在に對して〝憂鬱でいまいましい氣持ち（悒鬱不忿之意）〟を抱くようになるのである。その結果、黛玉は寶玉との關係までをも變化させる。

這日不知爲何、他二人言語有些不合起來。黛玉又氣的獨在房中垂淚。寶玉又自悔言語冒撞、前去俯就、那黛玉方漸漸的迴轉來。

この日もどういう譯かわかりませんが、二人は言葉にいささか行き違いがありました。黛玉は例によって怒って一人部屋の中で涙を流しております。寶玉も例によって自ら言葉に失禮があったと後悔し、（黛玉の部屋に）出向いて折れて出たので、黛玉の方もしだいに機嫌を直しました。

（第五回）

仲の悪い様子を殆ど見せる事のなかった二人の關係は、薛寶釵の登場を境に、ちょっとした言葉の行き違いから黛玉が怒り、泣き、寶玉が詫びを入れて仲直りするという關係に變化したのである。この二人の〝いさかいと和解〟という關係は第十七、八回から第三十二回までの間に集中して何度も描かれる。ふとしたことから、黛玉が寶玉に腹をたて、寶玉が詫びをいれて仲直りし、ほどなくしてまた黛玉が腹をたて、またいさかいをする、という展開を繰り返すのである。そんな中で第二十回における二人のいさかいには作者の設定した黛玉の心情を考察する際、興味深い描寫がなされている。

（黛玉）因問寶玉在那裏的。寶玉便說「在寶姐姐家的。」黛玉冷笑道「我說呢、虧在那裏絆住、不然、早就飛了來了。」寶玉笑道「只許同你頑、替你解悶兒。不過偶然去他那裏一趟、就說這話。」林黛玉道「……可許你從此不理我呢。」……林黛玉道「我作踐壞了身子、我死、與你何干。」寶玉道「何苦來。大正月裏、死了活了的。」林黛玉道「偏說死。我這會子就死。你怕死、你長命百歲的如何。」……（林黛玉）「……要是這樣鬧、不如死了乾淨。」……正說着、寶釵走來……便推寶玉走了。這裏林黛玉越發氣悶、只向窗前流淚。

（黛玉は）そこで寶玉にどこにいたのかと尋ねます。寶玉は「寶釵姉さんのところにいたのですよ。」と答えます。黛玉は冷ややかに笑って「なるほどね。あちらで引き止められていたというわけですか。そうでなかったら、とっくに（こちらに）飛んでいらしたんでしょうに。」と言います。寶玉は笑って「ただあなたとだけ遊んで、あなたの氣晴らしをしてあげなければいけないのですか。たまたまあの方（寶釵）のところに一度行っただけなの

に、すぐこんな事をおっしゃる。」と言います。林黛玉は「……今後は私にかまってくださらなくて結構です。」と言います。……林黛玉は「私が身體を粗末にして壞して、死んでも、あなたと何の關係がございまして。」と言います。寶玉が「どうしてわざわざそんなことを。お正月だと言うのに、死ぬの生きるのなんて。」と言いますと、林黛玉は「だからこそ死ぬと言うのですわ。私は今すぐ死にたいわ。あなたは死ぬのが恐いのでしたら、百歲までも長生きしたらどうですか。」と言います。……（林黛玉は）「……こんな風に騷ぐのなら、死んでさっぱりした方がよいのよ。」と言うのでした。……（などと）言っていると、寶釵がやってきて……寶玉を押して行ってしまいます。林黛玉はますます氣を腐らせ、ただ窓の前に向かって涙を流すのでした。

黛玉は寶玉が寶釵の所に遊びに行って足止めを食らっていたことを知ると、忽ち氣分を害し、死ぬの生きるのと寶玉を相手にいさかいを起こしている。ここには黛玉の寶釵に對する強い嫉妬心が描寫されている。つまりここから寶釵の登場を境に一變してしまった寶玉と黛玉の〝いさかいと和解〟という關係の根底には、黛玉の寶釵に對する強い嫉妬心があるという作者の設定が讀み取れるのである。作者の設定した黛玉の心情は、〝金玉緣（賈寶玉の持つ通靈寶玉と薛寶釵の持つ金の錠前が相配し二人の仲をとりもつという姻緣）〟がひきあいに出される時、よりいっそうはっきりする。

那林黛玉偏生也是個有些癡病的、也每用假情試探。……那林黛玉心裏想着「你心裏自然有我。雖有金玉相對之說、你豈是重這邪說、不重我的。我便時常提這金玉、你只管了然自若無聞的。方見得待我重而毫無此心了。如何我只一提金玉的事、你就着急。可知你心裏時時有金玉。見我一提、你又怕我多心、故意着急、安心哄我。」……那林黛玉心裏又想着「你只管你。你好我自好。你何必爲我而自失。殊不知你失我自失。可見是你不叫我近你、有意叫我遠你了。」

林黛玉もあいにくとばかげた病を持ってまして、常に偽りの情でさぐりをいれています。……林黛玉が心の中で想いますには「あなた（寶玉）の心の中にはもちろん私がいるでしょう。金と玉が對になるという話があっても、あなたがそんなでたらめを重んじて、私を輕んじることはありますまい。私がよしんばいつも金玉の事を持ち出そうと、あなたは構わずに堂々として聞かなければよろしいのですわ。それでこそ私を重んじて下さりいささかもそんな心（金玉を重んじる氣持ち）が無いということがわかろうというもの。（それなのに）どうして私がちょっと金玉の事を持ち出しただけで、あなたはすぐにいらだつのでしょう。（これによって）あなたの心の中にはいつも金玉の事があることがわかろうというものですわ。私が（その事を）持ち出したと見るや、あなたは又私が氣を回すのを心配して、わざといらだって、ぬけぬけと私を騙してしまおうとしているのですね。」……林黛玉が心の中で又想いますには「あなたはかまわず自分の事をしたらよろしいのですわ。あなたがよろしいのでしたら當然私もよろしいのですから。どうして私の爲に我を忘れたりなさるのでしょう。ところがあなたはあなたが取り亂せば私も取り亂してしまうという事を御存じない。（これでは）私をあなたに近づけまいとし、わざと遠ざけようとしているのがわかるというものですわ。」

（第二十九回）

黛玉はわざと〃金玉緣〃を持ち出し、それに少しも動じない寶玉の態度を求めているのである。黛玉は寶釵の登場以來、寶釵に強い嫉妬心を抱くようになり、それが原因で寶玉と〃いさかいと和解〃という關係を構築するようになった。黛玉はこの〃いさかいと和解〃を通じて、寶玉の自分に對する愛情、そして彼の寶釵に對する無關心を確かめようとしているのである。いわば黛玉は寶玉とのいさかいに愛情確認の意味を込めているのである。

以上、薛寶釵の登場を境に變化した寶玉と黛玉の〃いさかいと和解〃という關係には黛玉の寶玉に對する愛情確認の意味があるように設定されている事を考察した。その黛玉の行動の根本の原因には、彼女の寶釵に對する強い嫉妬心がある。黛玉のこの嫉妬心は寶黛釵の三角關係を構築する重要な要素である。これがなければかくも複雜な三角關係の心理劇は構築されえない。作者の極めて技巧的な設定であると言えよう。

（2）賈寶玉

原來那寶玉自幼生成有一種下流癡病、況從小時和黛玉耳鬢廝磨、心情相對。及如今稍明時事、又看了那些邪書僻傳、凡遠親近友之家所見的那些閨英閨秀、皆未有稍及林黛玉者。所以早存了一段心事。只不好說出來。故每每或喜或怒變盡法子、暗中試探。

もともと寶玉は幼いころより品の悪いばかげた病をもっていまして、況んや黛玉とは小さい頃より耳や鬢が觸合うほどでしたので、氣持ちもぴったりしておりました。加えて今ではいささか物事もわきまえ、またあの種のあやしげな書物やいやしい傳記などを讀みまして、（その上で）遠近の親戚友人の家で會ったあの幾人かの美女たちでも、皆いささかも林黛玉に及ぶものはいません。ですから早くより心に望む所を持つようになっておりました。ただ口に出すのは憚られます。故にいつもいつも喜んだり怒ったりと方法をかえて、こっそりと（黛玉の氣をひこうと）試しているのでした。

（第二十九回）

この語り手の記述から、賈寶玉は成長するにつれ林黛玉を戀愛對象に選んでいたと設定されていることが見て取れる。更に第三十二回には、寶玉が、科擧を勸める寶釵や史湘雲を非難した後に、次のような言葉を口にする場面がある。

「林姑娘從來說過這些混帳話不曾。若他也說過這些混帳話、我早和他生分了。」

「林のお嬢さんは今までにこんなばかげた話をしたことがないよ。もしあの人がこんなばかげた話をしたなら、とっくにあの人と仲たがいしているさ。」

寶玉は成長するにつれ、林黛玉の美しさを認め、更にその上、科擧などの立身揚名を口にしないという積極的理由もあって黛玉を戀愛對象に選んでいると作者は設定しているのである。しかし彼は一途に黛玉のみを思い詰めるようには描かれていない。

寶玉便笑道「寶姐姐、我瞧瞧你的紅麝串子。」可巧寶釵左腕上籠着一串、見寶玉問他、少不得褪了下來。寶釵原生的肌膚豐澤、容易褪不下來。寶玉在旁看着雪白一段酥臂、不覺動了羨慕之心。暗暗想道「這個膀子要長在林妹妹身上、或者還得摸一摸。偏生長在他身上。」正是自恨沒福得摸、忽然想起金玉一事來。再看寶釵形容、只見臉若銀盆、眼同水杏、唇不點而紅、眉不畫而翠。比林黛玉另具一種嫵媚風流。不覺就獃了。

寶玉は笑って言います。「寶釵ねえさま、あなたの紅麝香の腕輪を見せてください。」寶釵はちょうど左の腕に一つはめていましたので、寶玉にせがまれて、しかたなくはずしにかかります。ところが寶釵は生來豐滿な肌つきで、容易にははずせません。寶玉はわきで雪のように白いふっくらとした臂を見ますと、思わず羨望の想いにかられました。心の中で「この腕がもし林のお嬢さんに生えているのなら、もしかしたらなでることができたかもしれない。しかしあいにく寶釵ねえさまの腕についてるのだから。」などとその腕をなでる福の無い事を殘念がっているちょうどその時、ふっと〝金玉〟の事に思い當りました。（そして）もう一度寶釵の樣子を見てみますと、顏は銀のお盆の若く、眼は水杏に同じ、唇は點ぜずして紅色、眉は畫かずして翠。林黛玉とは別な艶やかな色氣があります。（寶玉は）思わずぽかんとしてしまいました。

（第二十八回）

ここに描かれている、寶釵に對する寶玉の感情は明らかに戀愛の對象としてのそれである。將來の結婚を意味する「金玉緣」に好意的な感情を抱く描寫が見られることからもそれは伺える。その他にも賈寶玉が黛玉以外の女性に好意を抱く場面は多い。第二十一回における湘雲に髮を結ってくれとまとわりつく場面、第三十回における金釧兒にまとわりつく場面、第三十回における鶯兒との會話などがそれである。要するに賈寶玉は寶釵をはじめとして、黛玉以外の女性たちにも好意を抱いているように描かれているのである。立身揚名などを勸める言葉を口にしないなどの理由から、林黛玉を戀愛對象に選んではいるものの、寶釵をはじめとするその他の女性達にも好意を持つ多情な人物として設定されているのである。この賈寶玉に設定された多情という要素も、先程の林黛玉の嫉妬心同樣、寶黛釵の三角關係を構築する重要な要素といえるだろう。これも作者の極めて技巧的な設定である。

(3) 薛寶釵

第二十八回、元春妃は姉妹達に贈り物をするが、寶釵のもののみ寶玉同等のもので他の姉妹たちとは一線を畫していた。

薛寶釵因往日母親對王夫人等曾提過金鎖是個和尚給的、等日後有玉的方可結爲婚姻等話、所以總遠着寶玉。昨日見元春所賜的東西獨他與寶玉一樣、心裏越發沒意思起來。幸虧寶玉被一個林黛玉纏綿住了、心心念念只掛着林黛玉、並不理論這事。

薛寶釵は前に母親が王夫人に、金の錠前はある僧侶がくれたもので、後日玉を持った人と結ばれる事になってるなどという話をもちだしたので、いつも寶玉から遠ざかるようにしていました。（さらに）昨日元春のくださったものが彼女だけ寶玉と同じだったのを見て、ますます、どうしていわれもないのに、という氣持ちになっていたのです。（しかし）幸いにも寶玉は林黛玉一人にひきつけられており、心にかかるのは林黛玉のみ、こんな事にはまったくおかまいなしです。

こういった描寫から、寶釵は寶玉と黛玉の關係を寧ろ肯定的に認め、〝金玉緣〟なる姻緣を煩わしいものと考えていたと設定されている事が見て取れる。しかし、寶黛釵の三者間のやりとりを考察すると、この公式のみでは割り切れないような描寫がいくつか見られる、彼女は寶玉と黛玉の仲に對して、特に黛玉に對して敏感な反應を示し、對抗心を見せるのである。以下、そういった寶釵の描寫を列擧してみた

い。

第二十五回、人事不省に陥った寶玉が何とか一命を取り留めた際、黛玉は安堵のあまりつい「阿彌陀佛」と唱えてしまう。

薛寶釵便回頭看了他半日、嗤的一聲笑。……「我笑如來佛比人還忙、又要講經說法、又要普渡衆生。這如今寶玉鳳姐姐病了、又燒香還願、賜福消災、今日纔好些、又要管林姑娘的姻緣了。你說忙的可笑不可笑。」

(すると) 薛寶釵はふりかえりしげしげと彼女 (黛玉) の方を見て、くすっと笑います。……「だって如來様は人よりもずっと忙しくて、經典を講じたり說法をしたり、また普く民衆を濟度しなくちゃならないのよ。今、寶玉さんと鳳姉さんが病氣になって、香をたいて願をかけた結果、福を賜って災いが消え、今日ようやく好くなったのに、又、林のお嬢さんの婚姻のことまで面倒をみなくちゃいけないのよ。こんなにも忙しいなんて、可笑しいじゃないですか。」

寶玉が助かったことに對する黛玉の念佛を、彼女の婚姻のことに結びつけてからかっている場面である。

第二十七回、寶釵は蝶を追っていくうちたまたま侍女の內緒話を立ち聞きしてしまう。

寶釵在外面聽見這話、心中吃驚、想道「怪道從古至今那些奸淫狗盜的人、心機都不錯。這一開了、見我在這裏、他們豈不躁了。……如今便趕着躲了、料也躲不及。少不得要使個金蟬脫殼的法子。」猶未想完、只聽咯肢一聲、寶釵便故意放重了脚步、笑說道「顰兒、我看你往那裏藏。」……誰知紅玉見了寶釵的話、便信以爲眞、讓寶釵去遠、……道「了不得了。林姑娘蹲在這裏。一定聽了話去了。」……紅玉道「若是寶姑娘聽見、還倒罷了。林姑娘嘴裏又愛刻薄人、心裏又細。他一聽見了、倘或走露了風聲、怎麼樣呢。」

寶釵は外でこの話を耳にすると、びっくりして、「なるほど昔からああいった人前をはばかるような悪事をする者は、考えまでご立派だわ。ここを開けて、私がここにいるのを見たら、あの娘たちははずかしがるに違いない。……今いそいで身を隱しても、おそらくは間に合うまい。〝金蟬殼を脫す〟の方法を使うしかないようだわ。」と考えますが、その考えがまだ終らないうちに、キシキシと音がしますので、寶釵はわざと足音をたてて、笑って「顰ちゃん (黛玉)、あなたがそこに隱れるのを見たわよ。」と言います。……ところが紅玉 (侍女) は寶釵のことばを聞くと、すっかり信じ込んでしまい、寶釵を遠くにやり過ごしてから、「大變。林のお嬢様 (黛玉) がここにしゃがんでいらしたんだわ。きっと話を聞かれたわよ。」と言います。……紅玉は「もし寶のお嬢様 (寶釵) に聞かれたのなら、まだ仕方がないわ。(でも) 林のお嬢様はお言葉が冷たいし、又お心もせまくていらっしゃる。あの方が (私たちの話を) 聞いて、もし噂にでもされたら、一體どうしましょう。」と言うのでした。

寶釵は自分の身を守るため、よりによって黛玉をだしにしてしまうのである。直接寶玉を間にはさんだ場面ではないが、黛玉をおとしめてしまう結果になっている。

第二十八回、寶玉は氣分を害したのではないかと思われる黛玉のもとへ早く行こうと急いで食事をするが、探春や惜春が何をあわてているのかと寶玉に問いかける。それに對して寶釵は次のように言う。

寶釵笑道「你叫他快吃了、瞧黛玉妹妹去罷。叫他在這裏胡鬧些什

麼。」

寶釵は笑って「この人（寶玉）に早く食べさせて、黛玉さんのところに行かせてさしあげましょうよ。ここにいさせてうるさくつきまとわせることはないわ。」と言います。

寶釵は妙に敏感に寶玉と黛玉の心理を察知している。

林黛玉冷笑道「他在別的上還有限、惟有這些人帶的東西上越發留心。」寶釵聽說、便回頭裝沒聽見。

林黛玉は冷ややかに笑って「あの方（寶釵）は他の事はともあれ、こういった、人が身に帶びるものの上には一層氣をおとめになりますのよ。」と言います。寶釵は顏をそむけて聞こえなかったふりをします。（第二十九回）

〝金玉緣〟を念頭においた黛玉の皮肉を寶釵はわざと聞こえなかったふりをする。

話說寶釵分明聽見林黛玉刻薄他、……並不回頭、一逕去了。

さて寶釵は林黛玉が自分に皮肉を言っているのをはっきりと聞きましたが……全く頭をむけずに、まっすぐに行ってしまいます。（第三十五回）

ここでも、寶釵は黛玉が自分と寶玉のことをあてこすっているのを耳にしながら、故意に無視している。

また第三十一回には次のような場面がある。

林黛玉聽了、冷笑道「他不會說話。他的金麒麟也會說話。」一面說着、便起身走了。幸而諸人都不會聽見、只有薛寶釵抿嘴一笑。

林黛玉は聞くと、冷ややかに笑って「あの娘（湘雲）は話ができないわよ。あの娘の金の麒麟が話ができるのよ。」と言いながら、立ち上がって行ってしまいます。幸いにしてみなはそれが聞き取れませんでしたが、薛寶釵だけは口を窄めて笑うのでした。

史湘雲の物言いを一同が賞賛した際の黛玉の言葉である。〝金麒麟〟は史湘雲が持つ飾り物であるが、賈寶玉も似たようなものを手に入れていた。したがって、黛玉がここでこだわっているのは、二人の麒麟が相配して緣を結んでしまうという事である。つまりこの場面は黛玉と寶玉、そして史湘雲の間の葛藤なのであるが、その黛玉の嫉妬心を寶釵がただ一人敏感に察知して反應している。これはまさしく寶黛釵の三角關係の一端と見てよい。これら一連の例からは、寶釵が黛玉と寶玉の仲を強く意識していることが伺える。

また第三十回には、いさかいを起こしなかなか仲直りできなかった寶玉と黛玉に對して、寶釵が雜劇の內容を利用してやりこめるという場面が見られる。

寶玉林黛玉二人心裏有病、聽了這話、早把臉羞紅了。鳳姐……詫異道「既沒人吃生薑、怎麼這麼辣辣的。」

寶玉と林黛玉の二人は心にやましい事（いつまでも仲直りできなかった事）がありますので、このことば（寶釵のあてこすり）を聞きますと、すぐに顏を羞かしさで赤らめます。鳳姐は……いぶかしんで「生姜を食べた人がいないのに、どうしてこんなにぴりぴりしてるのかしら。」と言います。

寶釵は空氣をぴりぴりさせてしまうほど二人をやりこめてしまう。ここからは黛玉を戀愛の敵手として意識したような強い對抗心が感じられる。

以上、寶釵の、黛玉と寶玉の關係に關する反應の描寫を揭げてみた。これらはみな、先の寶釵の心境を解說した語り手の地の文にあったような、寶玉と黛玉の關係を寧ろ肯定的に認め、〝金玉緣〟なる姻

緣を煩わしいものと考えていたという設定のみでは割り切れるものではない。もし本當に黛玉と寶玉の仲を肯定的に認めているのなら、二人の行動に一々敏感に反應したり、黛玉を戀愛の敵手として意識した對抗心を感じさせるこのような描寫が加えられる必要などないはずだからである。では前掲の地の文とこれらの描寫の差異はどのように解釋したらよいのか。これは古典長編小說にありがちな形象の分裂ということではあるまいと思う。第三十四回、父親に折檻された寶玉を寶釵が見舞う場面に次の描寫がある。

寶釵見他睜開眼說話、不像先時、心中也寬慰了好些。便點頭歎道「早聽人一句話、也不至今日。別說老太太太心疼、就是我們看着、心裏也疼。」剛說了半句、又忙嚥住。自悔說的話急速了、不覺紅了臉、低下頭來。

寶釵は彼（寶玉）が眼を見開いて口をきき、さっきまで（のひどい樣子）とは違っているのを見て、心中いくらかほっとしました。そこで頭をふって嘆息しながら、「早くに人の言うことを聞いていれば、今日の事態にはいたらなかったものを。大奥樣奥樣は言うまでもなく、私たちでさえ心が痛みます。」と半句ほど言いかけて、あわててのみこみます。自らはやまった言い方をしたものと後悔し、思わず顏を赤らめ、うつむきます。

ここに描寫された、痛めつけられた寶玉を見舞い、心をいため顏を赤らめる寶釵の態度から、作者が設定した彼女の寶玉に對するひそかな戀心を讀み取ることができよう。何の變哲もない言葉を言いながらはやまったと後悔し顏を赤らめる。この彼女の描寫から、「心が痛む」の言葉は意味深長なものであった事が伺える。つまりここは寶釵が危うく寶玉への戀愛感情を吐露しかけた場面なのである。つまり表面上では〝金玉緣〟を煩わしく思っていながらも、無意識下の根底には寶玉への想いがあったという二重構造が設定されていたのだと考えれば、先の一連の彼女の行動も說明がつこう。形象の分裂と考えるよりも、このような二重構造が設定されていたのだと考えた方が、より周到で深みのある男女間の三角關係を作り出せるように思えるのである。筆者は、この小說における戀愛譚はその位、作者によって周到に計算された戀愛譚であったと考える。作者は寶釵の形象を、彼女のたてまえと本音で描き分けているのである。この二重構造によって、寶釵は黛玉に對して對抗心を覺えるように設定されているのである。この寶釵の黛玉に對する對抗心は、やはり寶黛釵の三角關係を構築する際の重要な要素と言わねばならない。彼女のこういった側面が、黛玉の嫉妬心、對抗心を增長させる効果を生むからである。寶釵の對抗心は、先に考察した黛玉の嫉妬心、寶玉の多情とともに寶黛釵の三角關係を構築するきわめて技巧的な設定なのである。

以上、黛玉、寶玉、寶釵それぞれに項目をわけて主に第三十回前後までのそれぞれの描かれ方、そして作者の設定を考察した。この三角關係はやがて大きな山場を迎える。そのきっかけは寶玉の黛玉への想いの告白である。

寶玉瞅了半天、方說道「你放心。」三個字。林黛玉聽了、怔了半天、方說道「我有什麼不放心的。我不明白這話。……」寶玉點頭歎道「好妹妹、你別哄我。果然不明白這話、不但我素日之意白用了、且連你素日待我之意也都辜負了。你皆因總是不放心的緣故、纔弄了一身病。……」（寶玉）說道「好妹妹、我的這心事從來也不敢說、今兒我大膽說出來。死也甘心。……」

寶玉はまじまじと（黛玉を）見つめて、ようやく「安心なさったらよい。」の三字を言いました。林黛玉は聞くと、ぽかんとしてしまいました。そしてようやく「私に何か心配事でもあるというの。何のことかわからないわ。……」と言います。寶玉はうなずいて嘆きながら「黛玉さん、私をだますことはないよ。もしこのことばがおわかりにならないのでしたら、私の日頃の氣持ちが無駄になるばかりか、あなたが日頃私を扱ってくれた氣持ちまでも無にしてしまう事になるのですよ。あなたはすべて安心出來ない事によって、病氣になってしまわれたのです。……」と言い、……（寶玉は）「黛玉さん、私のこの心は今までどうしても言えなかったけれど、今、私は大膽にも言い出す事が出來ました。死んでも望むところです。……」と言います。（第三十二回）

儒教に縛られた社會においては「你放心」の三字を言うのがやっとである。しかしそれが戀愛感情の告白の意味として描寫されたものである事は、寶玉のその後の言葉、もしくは呆然としてしまう黛玉の描寫、またこの回の回目の上句「訴肺腑心迷活寶玉（肺腑を訴え心は迷ふ活ける寶玉）」からも明らかである。[3]

この寶玉の告白に對する黛玉の答はやや回を隔てた、第三十四回の寶玉折檻後の場面において表れる。父賈政に死ぬほど折檻を受けた寶玉のもとへ黛玉はこっそり見舞いにくる。

寶玉從夢中驚醒、睜眼一看、不是別人、卻是林黛玉。寶玉猶恐是夢、忙又將身子缺起來、向臉上細細一認、只見他兩個眼睛腥的桃兒一般、滿面淚光。不是黛玉卻是那個。……此時林黛玉雖不是嚎啕大哭、然越是這等無聲之泣、氣噎喉堵、更覺利害。……只見院外人說「二奶奶來了。」林黛玉便知是鳳姐來了、連忙立起身、說道「我從後院子裏去罷、回來再來。」

寶玉は夢からはっと醒め、眼を開いて見ると、他でもない、林黛玉がおります。寶玉は猶も夢かと疑いましたが、あわてて身體を屈めて、（黛玉の）顏を細かく眺めれば、彼女の二つの眼は桃のようにはれあがり、滿面に涙が光っております。これが黛玉でなくてだれだというのでしょう。……この時林黛玉は聲をあげて大泣きするのではありませんが、ますます聲を殺して泣く程に、息はむせび喉はつまり、さらにひどく感じられます。……庭の外で「二の奥様がいらっしゃいました。」と言うのを聞いて、林黛玉は鳳姐が來た事を知ると、あわてて身を起こし、「私、裏庭から行きますわ。のちほどまた來ますから。」と言います。

自分の部屋へ戻った黛玉の元に、寶玉は使い古しのハンカチを侍女晴雯に言い付け屆けさせる。

這裏林黛玉體貼出手帕子的意思來、不覺神魂馳蕩。寶玉這番苦心、能領會我這番苦意。又令我可喜、……再想令人私相傳遞於我、令我可懼、……

ここで林黛玉はハンカチの意味を察し、思わず魂はふんわりとします。寶玉のこの心使いは、私のこの度の心の苦しさを察してくれたからにちがいない。うれしいことだ、……考えてみると人にこっそりと私にとりつがせるなんて、恐ろしいことだわ、……

このやりとりには完全に通じ合った二人の氣持ちが描かれている。黛玉の見舞いの樣子、寶玉の心使いにはどこかしら溫かいものが感じられる。しかもハンカチを通して二人だけの世界すら共有しはじめている。作者の筆は、黛玉が寶玉の心が安心できない爲に、愛情確認の意味で繰り返していた〝いさかいと和解〟という黛玉と寶玉の關係を、

先の寶玉の告白を境にそのような關係から脱却し、お互いを信頼し合う關係へ進展させたのである。

一方、寶釵の感情もこの寶玉折檻の場面で變化を見せる。〃(3) 薛寶釵〃の項目で引用した第三十四回における場面なのであるが、無意識下の根底にあった寶玉への戀情をおぼろげながら寶釵自身が認識してしまうのである。

以上、前半部分における寶黛釵の關係を考察してみた。この三人の設定にはそれぞれ短所、つまり寶玉の多情、黛玉の嫉妬心、寶釵の對抗心が付與され、それを原因に複雑な三角關係が構築されていた。やがて寶玉の告白を境に寶玉と黛玉はお互いを信頼し二人だけの世界を構築しはじめるようになったが、一方同じ頃、寶釵も自分自身氣づかずにいた寶玉への戀情をおぼろげながら認識するようになった、という戀愛譚の展開が確認できた。寶玉と黛玉は信頼しあうようになったが、自分の氣持ちに氣づいた寶釵は果たしてこの二人の關係をこのままにさせておくのか、など讀者に次なる期待をいだかせる。まだ戀愛譚は終っていないのである。

二　第三十六回について

しかし前半部分に見られた戀愛譚と、續く第三十六回はどうもうまく接續しない。

或如寶釵輩有時見機導勸、反生起氣來、只說「好好的一個清淨潔白女兒、也學的沽名釣譽、入了國賊祿鬼之流。……」……獨有林黛玉自幼不曾勸他去立身揚名等話、所以深敬黛玉。

もしも寶釵などがやってきて機を見ていさめたりすると、かえって怒りだし、ただ「申し分のない清淨潔白な少女までもが、名譽を求めるようなまねをして、〃國賊祿鬼〃の仲間入りをするとは。……」と言います。……ただ林黛玉だけが幼い頃より寶玉に立身揚名などのことばで諫めたりした事がなかったので、深く黛玉を敬っている次第であります。

第三十六回におけるこの描寫では、寶玉ははっきりと寶釵を〃國賊祿鬼〃と罵倒し黛玉だけを敬愛している。しかし前半部における寶玉は科擧を勸める寶釵らにも好意を抱く多情な人物として設定されていた。科擧などの勉強を勸めるか否かは黛玉を一番に愛する事への理由であり、決してそれによって寶釵を罵倒してしまうものではなかったはずである。確かに第十九回において寶玉は讀書で名利を求める人を「祿蠹」と罵倒した事が語られるが、寶釵自身に對する罵語であるこの言葉とは質が違うと筆者は考える。また第三十二回においても寶釵や湘雲らのこういった側面に不快を示してはいたが、決して當人を罵倒する程のものではなかった。したがってこの場面の寶釵に對する罵倒は前半部の寶玉の多情という形象と矛盾しているという事が出來るであろう。更に同じ第三十六回には、

忽見寶玉在夢中喊罵、說「和尚道士的話如何信得。什麼是金玉姻緣。我偏說是木石姻緣。」薛寶釵聽了這話、不覺怔了。

突然寶玉が夢の中で「坊主や道士のことばなんか信じられるものか。何が金玉の姻緣なものか。僕は木石の姻緣だけを考えるぞ。」と罵り叫ぶのを聞いて、薛寶釵は呆然としてしまいました。

という描寫まで見られる。ここでははっきりと〃金玉緣〃を否定している。これは第一章前掲の、寶玉が寶釵の腕に見惚れ〃金玉緣〃の噂に好意的な感情をいだく場面（第二十八回）と完全に矛盾しよう。第三十六回の描寫における前半との矛盾が、先の例より更に明白に指摘

できる場面と言える。要するに、これら寶玉の言葉は寶釵を遠ざけすぎているのである。つまり前半の戀愛譚の表面だけをなぞったような、逆にいえば前半部戀愛譚において仔細に設定された機微を無視した描寫なのである。この第三十六回にはそれ以前の内容をまとめているかのような描寫が多い。引用の場面の他、寶玉が傷を癒し氣盡な生活を送っているという描寫、金釧兒の給金の處理、襲人が王夫人より特別の待遇を受ける事、寶玉が襲人に人生觀を語る事、寶玉が賈薔と齡官の關係を知り自己中心主義を訂正する事など、この回の描寫の殆どが前回までの内容をまとめたり補足的に付け加えたような内容ばかりで、物語の進行上連續した展開とは言えない。戀愛譚から見た賈寶玉の形象の不連續、そしてこのまとめるような描寫の多さを考慮した際、筆者には前半部第三十五回以前と第三十六回を一貫したものと結びつける事が困難に思われるのである。第三十六回と第三十七回に斷層をひく李賢平氏らの研究者はこの點に全く疑問を提示していないが、この第三十六回こそ『紅樓夢』成書の過程を探る際、鍵となる回になるのではないかと筆者は考える。

三　後半部における寶黛釵の關係

本章で扱う後半部分（第三十七回以降）における物語の展開を以下に簡單にまとめてみたい。第三十七～五十二回までには詩會や宴會を中心とした賈寶玉にとって樂園のような場面が描かれる。五十三～五十四回には年末年始の賈家の樣子、五十五～五十六回には賈探春の家事采配の樣子、五十七回には寶玉と黛玉の戀愛譚、五十八～六十三回には使用人を中心とした賈家の描寫、六十三～七十回には尤姉妹の物語、七十～八十回には賈家全體の暗い雰圍氣の樣子が描かれている。

つまり前半部分であれほど高まりを見せた戀愛譚は第五十七回を除けば殆ど描寫されていないのである。第五十七回の戀愛譚は、黛玉が故郷に歸ると誤解した寶玉が人事不省に陥るという内容であるが、前後の回とは殆ど結びつかない。明らかに後半は主題が變化しているのである。しかも後半においては、寶玉と黛玉の關係に逆行が見られる描寫がなされたりもする。

只因他雖說和黛玉一處長大、情投意合、又願同生死、卻只是心中領會、從來未曾當面說出。況兼黛玉心多、每每說話造次、得罪了他。ただ寶玉は黛玉とは一緒に育ちましたので、意氣投合し、また生きるも死ぬも一緒にとは思うものの、心の中で思っているだけのことで、いまだかつて面と向かって言ったことはありませんでした。まして黛玉は何かと氣を回すたちですので、いつも話をするごとに彼女を傷つけてしまうのです。（第六十四回）[4]

第一章で考察した通り、寶玉と黛玉の關係は寶玉の告白を通してお互いを信頼するようになり、〝いさかいと和解〟という關係から脱却したはずである。しかし、ここに描かれている二人の關係はまさに〝いさかいと和解〟の關係そのものである。戀愛譚の流れから見た際、この關係は逆行したものと言えるであろう。しかも第三十二回において賈寶玉ははっきりと黛玉に想いを打ち明けているのであるから、ここで「從來未曾當面說出」というのも明らかにおかしい。そもそも黛玉と寶玉の關係を地の文で說明するのでさえ、今更といった感じがする。もはや第六十四回にいたり、讀者はいやというほどこの二人の樣子を見てきているからである。

また黛玉と寶釵の關係についても同樣に前半との不連續が指摘できる。あれほど角を突き合わせていた二人が突然和解するのである。き

っかけは第四十回において、黛玉が酒令の席上、罰杯を怖れるあまり『西廂記』や『牡丹亭』を踏まえた文句を口にしたことに對して、後日寶釵がこっそりと黛玉に注意を與えたことによる。

……（寶釵）款款的告訴他道「你當我是誰。我也是個淘氣的。從小七八歲上、也彀個人纏的。我們家也算是個讀書人家、祖父手裏也愛藏書。先時人口多、姊妹弟兄都在一處、都怕看正經書。弟兄們也有愛詩的、也有愛詞的、諸如這『西廂』『琵琶』以及『元人百種』、無所不有。他們是偷背着我們看、我們卻也偷背着他們看。後來大人知道了、打的打、罵的罵、燒的燒、纔丟開了。所以咱們女孩兒家、不認得字的倒好。男人們讀書不明理、尚且不如不讀書的好。何況你我。就連作詩寫字等事、這並非你我分內之事、究竟也不是男人分內之事。男人們讀書明理、輔國治民、這便好了。只是如今並不聽見有這樣的人。讀了書、倒更壞了。這是書誤了他、可惜他也把書蹧蹋了。所以竟不如耕種買賣、倒沒有什麼大害處。你我只該作些針黹紡績的事纔是。偏又認得了字、既認得了字、不過揀那正經的看也罷了、最怕見了些雜書。移了性情、就不可救了。」一席話說的黛玉垂頭吃茶、心下暗服、只有答應「是」的一字。……（寶釵は）ゆっくりと彼女（黛玉）に「あなたは私をどんな人だと思っているのかしら。私もお轉婆な娘でしてね。七、八歲のころからずいぶんと人につきまとって迷惑をかけたものだわ。私どもの家も讀書人階級の中に入りまして、祖父がたくさんの本を持っていましたの。以前は人の數も多くて、姊妹兄弟みな一緒におりまして、みなまともな本を讀むのを嫌っておりましたわ。兄弟の中には詩が好きな者もいますし、詞が好きな者もいまして、例えばこの『西廂記』や『琵琶記』から『元人百種』に至るまで、無いものは無いといったほどだったのですよ。彼らは私たちにかくれて（あやしげな本を）讀んでいましたし、私たちも彼らにかくれてそれらの本を讀んでいたものです。後に大人の人にその事を知られ、打たれる者は打たれ、罵られる者は罵られ、燒かれる本は燒かれて、やっと私たちはそれらの本から手をひきました。だから私たち娘は、字なんか知らない方が良いのよ。男の人たちでも本を讀んで道理をわきまえる事ができないのなら、本など讀まない方がましというものだわ。ましてあなたや私などはなおさらだわ。詩を作ったり字を書いたりすることは、決して私たちの本分ではないばかりか、結局のところ男の人の本分でもないのよ。男の人で本を讀み道理をわきまえ、國を輔けて民を治めるのならば、それは良い事だわ。でも當今そんな人はついぞ聞いた事がありません。本を讀んで更に惡くなるばかりですもの。これは本が彼を誤たせたのですけれど、殘念な事にその人も本を台無しにしたのです。だから、田を耕したり商賣をしてる方が何も大きな害が無くてましと言うものです。私たちはただお針の仕事だけやっていれば良いのですわ。それでもわざわざ字を覺え、既に字を覺えてしまったからには、まともな本だけを讀むならまだしもだけど、もっともおそれなければならないのはあれらの雜書なの。人の心情を變えてしまい、救い難くしてしまうからよ。」と言うのでした。一席話を聞かされている間、黛玉は頭を下げて茶をすすりながら、心の中ではひそかに感服しておりまして、ただ一言「ええ」とだけ答えます。（第四十二回）

黛玉が感服してしまう寶釵の言葉の全文である。これ以後なぜか黛玉の寶釵に對する感情は一變してしまい、黛玉は寶釵に絶大の信頼を抱

くようになる。そして二人の溫かい友情が隨所に描寫されるようになってしまうのである。黛玉自身、嘗ては寶釵をずるい人間だと誤解していたのだと認めるような言葉を言ったりもする（第四十二、四十五回）。しかし、この寶釵と黛玉の和解はあまりにも突然であり、第一章で考察した寶釵と黛玉の關係とは全く接續しない。たしかに作者は黛玉に寶玉の告白以降、寶玉への信頼を高め、〝いさかいと和解〟という關係から脱却させた。しかしそれは寶玉との關係の變化にすぎないのであり、寶釵への對抗心には何ら變化がないはずである。その證據に第三十四回において黛玉は、兄と喧嘩して泣いた跡のある寶釵の顔を見て、

「姐姐也自保重些兒。就是哭出兩缸眼淚來、也醫不好棒瘡。」

「お姉さまもご自愛なさったら。例え二瓶分涙をお流しになっても、（寶玉の）棒に打たれた傷は良くならなくてよ。」

と、寶釵に對して寶玉との事をあてこするような嫌味を相變わらず口にする描寫がなされている。そして何よりこの和解のきっかけになった寶釵の諫言にこそ一層の問題がある。なぜ黛玉がこんな言葉にかくも感服してしまうのか、前半の彼女の形象からは全く理解できない。内容は要するに『西廂記』のような雜書は讀むべきではない、女性は本分を守って家の仕事をしていればよい、男性は本を讀んだら國のために働かねばならない、というものである。これは、賈寶玉が忌み嫌う「立身揚名」の論である。又、前半部において『西廂記』は、寶玉と黛玉を結ぶ線の一つとして描かれていた。そもそも黛玉は寶玉から『西廂記』を借りて讀んだのであり（第二十三回）、お互いにその内容を賞贊できる點が二人のつながりの一つとして描寫されていたのである。こんな内容の諫言に黛玉が心底感服してしまっては前半部の黛玉と矛盾するばかりか、寶玉との信頼まで覆さねばならなくなってしまう。

前半から豫想される戀愛譚の展開が全く無く、戀愛譚と呼び得る描寫が第五十七回にしか見られない事、寶玉黛玉の關係、黛玉寶釵の關係の前半との不連續といった問題はどのように理解すればよいか。筆者は先に別稿において、「甲戌本」第一回に列擧されたこの小説の五つの異名（「石頭記」「情僧錄」「紅樓夢」「風月寶鑑」「金陵十二釵」）は、元來「石頭記」以外はそれぞれ別個の小説として獨立しており、それらが統合して現行本が出來上がったのではないかとの見解を提示した。[5] この見解を本稿の問題にもあてはめ、前半部分は戀愛を主題とした小説を基調としており、後半部分はそれとは別の小説を基調としていると考えれば、先の矛盾はすべて解消しよう。その際、思い起されるのが第二章で扱った第三十六回の問題である。第三十六回は前半と後半のそれぞれ別個の小説を繋ぎあわせる爲に、前半部分をまとめる目的で後に作られた回なのではないか。だからこの回は、前半の展開とはやや不連續な描寫がなされたり、まとめるような描寫が多いのである。この回こそ、二つの別個の小説を繋ぎあわせた痕跡として現在指摘し得る場面と筆者は考える。

筆者が考える後半部分の基調をなす元來の小説の主題は、樂園のような貴族生活とその崩壞による無常感（以下この主題を「貴族生活崩壞譚」と簡稱）である。元來のこの「貴族生活崩壞譚」における貴族生活の描寫は、主人公が仙女のような女性たちに圍まれた樂園のような描寫であったと思われる。そしてそれは限りなく樂園であるが故にそれが崩壞した時にいっそう無常感を感じさせる効果を生んだであろう。そこに描かれる生活においては主人公が特定の女性に戀情を抱く

こともなかったであろうし、女性同士が敵對することもなかったであろう。主人公がその戀情によって切ない思いをしたり、別の女性との三角關係に心を患わすようでは、もはや樂園のような生活とは言えないものになってしまうからである。このミニ小說が後になって「戀愛譚」のミニ小說と第三十六回を境に接續する事になる。そうするとどうしても前半部分の寶黛釵の關係と後半部分の友好的なそれは不連續にならざるを得ない。この時に前半、後半それぞれの寶黛釵の關係を合理的に接續すべく加えられたのが引用の黛玉と寶釵の和解の場面なのではあるまいか。寶玉と黛玉の逆行の描寫、第五十七回の戀愛譚もこれと同樣に後に加えられた描寫で後半の基調をなす本來の「貴族生活崩壞譚」の小說中には無かったものと解する。

おわりに

本稿では戀愛譚という主題から仔細にその展開を考察し、八十回を前半と後半に分け、前後の問題點を指摘し、前半は戀愛譚を基調としているのに對して、後半は貴族生活崩壞譚を基調としている事を示し、かつその中間に位置する第三十六回という回は前半とも後半とも連續しない別の次元、卽ち兩者を接續すべく後になって前半部をまとめる目的で書かれた回なのではないかという見解を示した。從來なされてきた大方の見方、すなわち前半、後半一貫した筋の小說として讀む見方では本稿で扱った多くの問題點が說明できないからである。何よりその見方では、前半部においてあれほど周到に展開されてきた戀愛譚が、後半において全く消えてしまう事がどうしても理解できないのである。この事は筆者の別稿における見解、すなわち現行本『紅樓夢』は別個の小說を集大成したものであろうという見解を裏付けるものである。その結論と緊ぎあわせるなら、前半の基調をなしたのは戀愛譚「情僧錄」であり、後半の基調をなしているのは貴族生活崩壞譚「紅樓夢」であると言えよう。

注

(1) 李賢平「《紅樓夢》成書新說」(一九八七、『復旦學報(社會科學版)』一九八七年第五期)參照。またその他の、加藤知彥「紅樓夢の構成について」(一九五六、『中國文學報』第四册)、鎌田利弘「「紅樓夢」構成の方法」(一九六〇、『集刊東洋學』第四號)、小西昇「「紅樓夢」の構成—前八十回—」(一九七〇、『熊本大學敎育學部紀要(人文科學)』第十八號第二分册)などの構成に關する論文においても、一大轉換點とするわけではないが、第三十六回と第三十七回の間に斷層をひく。

(2) 原文は兪平伯校訂『紅樓夢八十回校本』(一九七四、中華書局香港分局)を使用。

(3) 注2の「校本」に從ったが、テキスト間においても異同はない。

(4) この回は第六十七回とともに、最も古い寫本と目される「己卯本」「庚辰本」において等しく缺けている回であり、その段階からすでに問題のある回である。

(5) 拙稿「『紅樓夢』形成に關する試論—「風月寶鑑」を中心にして—」(一九九五、『中國—社會と文化』第十號)參照。この論文の中で筆者は「石頭記」を除く四つの書名が元來は獨立しておりそれを集大成して「石頭記」が出來上がったのではないかとの考えを提示した。又、同「夏金桂と賈迎春—『紅樓夢』成書の過程からみた一側面—」(一九九五、『集刊東洋學』第七十四號)もこの問題と關連するものである。

(付記)
本稿を成すに當たって、伊藤漱平先生より貴重な御敎示を賜った。記して厚く感謝申し上げる。